

令和5年度

第42回 宇治市「中学生の主張」大会 まとめ



主催：宇治市教育委員会・宇治市青少年健全育成協議会・宇治市連合育友会

はじめに

昨年度の大会は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、一般参加の入場を制限し、ご家族や一部の来賓、関係者のみで開催しました。しかし、今年度は、入場制限を無くし、広く市民の皆様にご来場いただき、第42回宇治市「中学生の主張」大会を宇治市文化センター小ホールにおいて開催することができました。

市内11中学校の代表生徒が、学校生活や私生活で体験したことや家庭でのやり取り、地域の人々との交流などによって、普段感じていることを中学生の鋭い感性と素直な気持ちで表現し、素晴らしい主張発表をしてくれました。また、2階のロビーでは、宇治支援学校の取組の紹介や中学部生徒の作品展示を行い、多くの方にご覧いただきました。

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、社会環境が大きく変化する現代社会において、これからの時代を担う子どもたちは、想定していない困難に直面した際に、解決策を見出していく力、自己の考えを大切にするとともに、他者と協調しながら新しい価値を生み出していく力などを身に付けることが大切です。

そういった意味で、日頃「考え、悩み、求めている」ことを発表する機会として昭和57年から設けられた本大会は、中学生が主張発表を通じて互いに学び、考えることができる意義の大きい大会と言えます。

この大会に向け、発表生徒の皆さん、大会当日の司会や表紙絵を作成された皆さんは、様々な工夫を重ね練習をされてきたことと思います。自分たちが納得するまで繰り返し練習したり、細かな部分まで追求したりしてこられたと思いますが、その経験は今後の人生の大きな財産になるのではないかと思います。

今年度もここに、『第42回宇治市「中学生の主張」大会まとめ』を発刊する運びとなりました。このまとめ冊子をご一読いただくとともに、中学生の健全育成を図るためにご活用いただき、今後とも、青少年の健全育成に向けた活動がさらに充実・発展していくことを期待しております。

結びに、本大会の開催及びまとめの刊行にあたり、ご尽力を賜りました関係各位に厚くお礼を申し上げます。

宇治市教育委員会
教育長 木上晴之

あいさつ

昨年、一昨年は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、縮小開催となりましたが、本年は、参加の制限をせず、ようやく広く市民の皆様にも中学生の皆さんの主張発表を聴いていただける運びとなりました。

宇治市教育月間並びに子ども・若者育成強調月間の行事として開催しております本大会も、今回で42回を迎えました。この間、社会情勢は目まぐるしく変化し、近年はオンライン会議やテレワークといった新たな働き方など、私たちの生活様式も随分と変わってきました。

子どもたちを取り巻く問題行動の様子も、インターネットやSNSによるトラブルやいじめなどに形を変えるなど、深刻な社会問題となっています。

中学校の3年間は、様々な人と出会い、つながっていく中で、自分という人間を形づくり、大きく成長する、人生でかけがえのない3年間です。

今年度も中学生の鋭い感性と素直な気持ちから生まれる主張を私たちに真っ直ぐ届けてくれることを楽しみにしています。頑張ってください。

子ども達を日頃からご家庭で支えてくださっている保護者の皆様、並びに宇治市立の小・中学校で昨年度よりスタートを切りましたコミュニティ・スクールにおいて、様々なご支援・ご協力をいただいている地域の皆様に、この場をお借り致しまして、改めて感謝申し上げます。

結びにあたり、本大会が今後の皆さんの更なる成長の場となることを祈念し、大会運営や生徒のご指導にご尽力いただきました各中学校の先生方をはじめ、関係各位に厚くお礼を申し上げます、主催者を代表してのご挨拶といたします。

宇治市「中学生の主張」大会実行委員会
実行委員長 木 上 晴 之

主張発表

愛であふれていてほしいから

宇治中学校1年 なか がわ ここ み
中 川 心 美

私は、最近学校で平和学習をした。そのときに見た、戦争で犠牲になってしまった赤ちゃんをおんぶしている兄の写真がとても心に焼きついている。この世界で一番かわいいものは人だと思う。でも、この世界で一番人をいやしたり、愛にみたしたりしてくれるのも人だと思う。

戦争によって生まれるものは何だろう。お金？正義？強さ？そんなものはない。いつだって人は、支え合って生きていかななくてはいけないのに、なぜ戦っているのだろう。戦争をして生まれるものなんてないと私は考える。みんな大切な家族がいる。いつも、家族というのは特別な存在である。いやなことがあったときも、つらいときも、うれしいときも、私は家族という気がする。こんなに家族というからこそ、家族に穴があいたとき、悲しみははかり知れないものになると思う。私には、2才の弟がいる。いやなことがあったときは、弟にいやされて、すべて「まあいいや」と楽な気持ちになれる。私は幸せだと思う。「おはよう」と朝起きて、家を出るときも帰るときも、「行ってきます！」「ただいま」と言えて、「おやすみ」と夜に寝て一日を過ごすことは、当たり前ではないと思う。それを毎日続けられているから、当たり前ではないことを、私も、みんなもきっと忘れている。戦争なんて何もいい事がない。戦争によって失われたものは数えきれないぐらいあると思う。みんな命の価値は同じ。政治が決めたことで、何も関係のない人々がどんどん犠牲になっていくのは本当に悔しい。そして、心から戦争がいやだと思ったことはもう一つあった。

私はバレエを習っている。私の通っているバレエ教室は、ウクライナのバレエ団と深い交流がある。そこで私はたくさんのことを学んだ。それは、ウクライナの方たちのために、チャリティーコンサートに参加したときのことだ。そこでは、ウクライナの子どもたちがウクライナの「現実と理想」の絵を描いたものが展示されていた。たくさん絵があったけれど、私が一番印象に残った絵があった。その絵には、家族と思われる人たちがみんな笑顔で楽しそうに生活している理想が、家の近くに爆弾のようなものが落とされていて、家の中には子どもが一人でぽつんと座っている現実が、描かれていた。その絵を見たとき、とても悲しかった。この子には、私たちがケアすることのできない、見えない、大きな心の穴があいているのだと思う。そして、もう一つ貴重な体験をした。

それは、今年の夏休みのことだ。二年に一度の発表会で、ウクライナのバレエ団の方たちと一緒に舞台に立った。ウクライナの方たちは、親せきや友達など、大切な人が戦争の犠牲になってしまった方もいるし、本当はこのウクライナの現状がつらくてたまらない方もいるのに、私たちに つらくて悲しい顔は、絶対に見せなかった。そして、バレエ団の方たちは、私たちに貴重ですばらしい景色を見せてくれた。これらの体験で私は、戦争のつらさ、人々への影響を学んだ。この経験はずっと忘れないでいたい。

この世界で1番かわいいものは、人だと思う。人なら何でも作れてしまうからだ。だが、この世界で1番人を愛することができるのも人だと思う。戦争は失うものしかない。しかし、そんな戦争があったからこそ、私たちは今生きていると思う。「繰り返していない」からだ。もう二度と戦争はしないでほしい。これが私の願いである。いつだってこの世界は愛であふれていてほしいから。

後悔せずに生きるために

西小倉中学校3年 おち 落 亀 陽 向

数年前、家庭の様子が変わった。働いてるので、二週間に一回程しか来れない祖母が、三日連続で僕の家に通ったり、いつもは八時に家を出て十七時頃には帰ってくる母も、この三日間は七時に家を出て十九時や二十時頃に帰ってきた。いつも僕が習い事から帰ったら笑顔で迎えてくれる父も、この三日間は迎えるどころか、家にも居なかった。この三日間を終えた次の日に母に言われた。「今から病院に行くから車に乗って。」僕は車に乗り込んだ。

病院に着き、大きめの病室の前まで連れて行かれた。その時、病室のドアに書かれていた名前を見て、嫌な予感がした。そこには僕の大好きな祖父の名前が書かれていたのだ。震えながらドアを開け、恐る恐る中を覗くと、そこにはいつも通り笑顔で元気そうな祖父がいた。その姿を目にした僕は自然と不安がなくなった。「どうかしたの。」僕が祖父に聞くと、祖父は何も答えてくれなかった。母も黙っていた。すると祖父が紙とペンを手に取り、「話せなくなった」そう書かれた紙を僕の目の前に置いた。僕は、涙が溢れて止まらなくなった。実は、祖父はいつ息が出来なくなってもおかしくない病気にかかっている、すぐに手術を受けなければならないと診断され、その日に手術を受けたらしい。医師からは「手術をすると話せなくなる可能性がある」と説明されていたそうだ。そして、結果は話せなくなってしまった。祖父は、その日手術の結果を知って、「紙に書いて話せば問題ない。手術を受けてよかった。」と僕に伝えてくれた。その時祖父が手術を受けた結果、話せなくなってしまったけれど後悔していない事を感じると同時になんでもっと祖父と話さなかったのだろうと後悔していた。祖父と会話する事は出来るけれど、祖父の声を二度と聞けない事が本当に辛かった。この辛さを味わってほしくない。だから、みんなは後悔をしないように生きてほしい。もし今、大切な人や自分が話せなくなったとしても、「後悔する事はない。」と言い切れるだろうか。そのくらい、その人や物事に、全力を尽くしているだろうか。僕はこの後悔をしてから必ず人や物事に全力を尽くすようにしている。だからみんなも何でも全力で取り組んでほしい。そして、失敗するリスクを背負っていても色々な事に挑戦してほしい。失敗する事はとても怖い。だけど失敗を恐れて後から後悔するより、挑戦して成功したり失敗したりする方が、良いと思う。だから、一度「自分は出来る。」と思って、挑戦してほしい。挑戦して後悔する事など決してない。だから、失敗を恐れずに前向きに挑戦することが大切だ。実際、祖父も失敗したものの、手術を受けた事に後悔はしていない。

このように、後悔をしないで生きるためには、人や物事に全力を尽くす事と失敗を恐れず挑戦する事が大切だと考える。僕は、必ずしも楽しい日々を送るべきだとは思わない。だが最低限、辛かったり苦しい日々は送るべきではないし、送ってほしくない。だから、どんどん挑戦して、全力を尽くしてほしい。また、どんなに落ち込むようなことがあっても、どんな失敗をしたとしても、前向きに、成功するまで挑戦し続けてほしい。そして、後悔のない人生を歩み続けよう。なぜなら人生は一度きりだから。

宣誓、僕は自由に生き続けることをここに誓います。

広野中学校3年 ^{ほり}堀 ^{ぐち}口 ^い維 ^{しん}真

生とは。何故私たちは生きるのだろうか。生物学的には本能的な死への恐怖と種の存続のためだと言えるだろう。しかし、現代社会に生きる私たちにとって、その目的というものは薄まっている。また、率直に言えば、全ての人が目的を持って生きているわけではない。僕は持っていない。だから生に対して疑問を抱くのだ。では、一体どうすれば目的を持って生を謳歌できるのだろうか。

「自由に生きる」そうすれば生に喜びを感じられるだろう。つまり「自由に生きる」ことは生きる目的を見つけるための最善策になるということだ。そもそも自由とは何か。自由には、完全なる自由であり受動的な意味を持つ freedom、制約ある自由であり能動的な意味を持つ liberty の2つの意味がある。先ほど述べた「自由に生きる」の自由は、自らを由とする liberty だ。例えば、社会や学校といったルールが存在する中で自身の特技や個性を活かし、自身を表現するというのはまさに「自由に生きている」のである。

では、何故「自由に生きる」ことが生きる目的を持つための最善策となるのか。それは、知識への疑問は学ぶことでしか解消されないように、生への疑問も、生きることでしか解消されないからだ。人と関わりを持つなど、生の体験を求めると、生の喜びを感じると、おのずと生への疑問は消失するだろうということだ。

現代社会で生きるというのはつらいことの方が圧倒的に多い。故に生きる目的を失ってしまう。言い換えれば、生に対して疑問を抱いてしまうのは至って普通のことのように思える。だからこそ、一生に一度の自分という人生を楽しむべきではないだろうか。そのために「自由に生きる」のだ。

哲学者カントは生への疑問の解決の仕方を問われた時「道徳的に生きよ」と答えた。たしかに、「道徳的に生きる」ことは大切だ。実際僕も自由すぎて人を傷つけてしまったことがある。そして、人を傷つける自由は間違いであり、傷つけないために道徳的に生きるのが正解だという意見がある。しかし、両者に正解や間違いはないはずだ。そもそも、人を傷つけないよう「道徳的に生きる」のは当たり前である。だから、自己中心的な自由で生きるのではなく、道徳という制約を範疇とする自由が望ましいだろう。

僕は一生に一度である自分の人生を楽しみたい。それに加えて、過去の失敗を改め、道徳を重んじたい。だから、宣誓、僕は自由に生き続けることをここに誓います。

壁をこえて伝える

立命館宇治中学校3年 ^{たけ}竹 ^{もと}本 ^{あり}有 ^り里 ^さ彩

「おはよう」「ありがとう」「ごめんなさい」

何気ない挨拶や会話、コミュニケーションをとることはなぜ必要なのでしょう。

私はこの夏休みの間、オーストラリア研修に二週間行きました。二週間ホームステイをして過ごすというなかで私が一番に心配をしていたことがありました。それは会話です。初対面の人と話すことが苦手で、英語が不得意な私は、現地で本当に会話が続くのだろうか、とても心配でした。そんな気持ちを持つ中オーストラリアに行き、ホストファミリーと対面して、初めて同じテーブルで夕食を食べた時、緊張して質問をされてもあまり話さない私にホストマザーから「あなたはシャイね」と言われました。何気ない一言でしたが、その時ホストマザーは、少し悲しそうな表情をしたようにも見えました。おそらく、優しく陽気に話しかけてくれるホストファミリーは、何も話さない私に大きな壁を感じていたのだと思います。私はその時、英語に自信がないという理由で自分から会話に入らなかったことや、最初から「伝わらない」とあきらめていたことをとても後悔しました。また、「冷たい人」という印象を持つような態度をとってしまったことを深く反省しました。

その次の日からは、少しでも自分から会話をするようにこころがけました。会話をしていく度に、私は大切なことに気が付きました。相手との会話に大切なのは英語の力だけではなく、「伝えたい」という気持ちだということです。私も最初は「自分から話しても伝わらないだろう」や、「どうせ自分のことは気にされていない」「今は言わないほうがいいのではないか」などといったマイナスな思考から、コミュニケーションを遠ざけてしまいました。ですが「うれしい」や「驚いた」などのささいな一言だけでも、自分の気持ちや考えを伝える事で、相手ともわかり合うことが出来るのです。また、コミュニケーションをとることで、その人の本当の気持ちや知らなかった本当の姿が見えてくると思います。

しかし、コミュニケーションをとっていくうちに、伝わらないということや、自分と違った意見で食い違いが起こる、などといったうまくいかないこともあると思います。ですがぶつかった時もお互いを認め合い、また違った見方や新しい発見ができるのがコミュニケーションだと思います。実際に、「あなたはシャイね」とホストファミリーが私に伝えてくれたおかげで、自分も相手の考えを知ることが出来ました。

研修旅行を終え、今私が忘れられない一番の言葉は、ホストファミリーがお別れの時に言ってくれた「You are a good girl」です。この一言で、生活しているうちにホストファミリーとの距離が縮まっていたことが分かってとても嬉しかったです。何気ない会話でも気持ちを伝える事でイメージや心の距離は変化するのだと感じました。

「おはよう」「ありがとう」「ごめんなさい」

コミュニケーションをとることは、その人の「伝えたい」という気持ちであふれていると思います。自分の気持ちや会話を聞くこと、話すこと、理解すること。どれも不必要なものはないと思います。私もコミュニケーションを大切に、沢山のひとにかかわっていきたくと思います。自分の意見や気持ちを伝える事でコミュニケーションが始まります。

私が今、皆さんに伝えたいのは「最後まで聞いてくれてありがとう」という気持ちです。

日常生活の中で考える人権

東宇治中学校2年 にし西 だ田 おお大 が峨

自分は最近まで、男に生まれたなら男として生きる、女に生まれたなら女として生きるというのが当たり前だと思っていた。女の子か男の子かわからない人も、今考えればいた気がする。そういう人たちがどんな思いでそうなったかなんて、これまでの自分は考えたこともなかった。しかし、そのようなことに何の興味もなかった自分が初めて性に関して考えることに出会った。

小学校六年生の時に、急に「おかま」という言葉を一部の人が使い出したのがきっかけだった。当時の自分は、最初「こいつら、何言ってるの。」と思っていた。ずっと学校で言っているから、友達に意味を聞いてみたら、

「男やけど女になってる人や。」みたいなことを言っていた。それを聞いてなぜ使っているのかが分かった。友達同士の冗談のつもりでのいじりだった。そして自分も「おかま」という言葉を使って軽い気持ちでいじるようになった。「おかま」という言葉を人に対して使うことも、言われた人がどんな気持ちになるのかも、そして軽い気持ちで冗談のつもりで人をいじることも、人としてやってはいけないことだという認識がその時の自分にはなかった。

中学生になって、「人権学習」があり、自分の身の回りの人権について振り返り、社会には様々な人権差別があることを学んだ。「人権侵害」という言葉も知った。が、その時ですら、自分の普段の言動が「人権侵害」にあたることになるのだという重みを感じていなかったと思う。自分はこれまで人権侵害なんかしていないと思っていた。

二年生になり、「LGBTQ」について学習した。学習が進むと、これまで当たり前だと思っていたことと違う考え方や感じ方があることが分かった。具体的に言うと、「男に生まれたなら男として生きる」とか「性別は男と女だけだ」と思っていたけれど、そこにとられるのではなく、一人の人間として尊重されることが大切なのだ分かった。と同時に、以前に自分が「おかま」と言って友達をいじめていた言葉が「差別用語」であり、人権侵害に当たるのだということに気づいた。

学習したことが自分の行動とつながって、改めて自分を振り返ることができたのだと思う。これまで軽い気持ちでやっていたことが、どれだけ相手を嫌な気持ちにさせていたのか。自分が何も考えずに発言していたことを、今になって後悔している。知っていれば、あんなことは言わずに済んだのではないだろうか。もっと早く人権のことを学びたかったとも思っている。正しく学ぶことの重要性を感じた。今の自分なら、言う前に、行動する前に、相手がどんな気持ちになるかを考えて、言うべきでないことは言わない。行うべきでないことは行わない。決して人を差別する言葉は使わない、そう決めている。

LGBTQの問題は複雑で、簡単ではないとは思いますが、つらい過去があっても今に至っている人の実話を聞かされると、とても応援したくなってくる。

人権は、差別や人権侵害を受けている人たちだけの問題ではなく、僕たち一人一人の生活とかわかっていることが多いのだから、僕がそうであったように、みんなが自分事であるという気持ちを大切にしていかなければならない。それを意識することで、僕も、周りの人たちも、その未来が変わるかもしれない。みんなにとって人権が大切にされる未来にしていきたい。

私はお姉ちゃん

西宇治中学校1年 ^{やま}大 ^と和 ^え愛 ^ま茉

私には1歳年下の妹と、8歳年下の弟がいます。家族からお姉ちゃんと呼ばれたことはないけれど、生まれた時からお姉ちゃんです。弟は最近、戦いごっこをしかけてきたり、くだらない悪戯をしてきたりして、たまに「鬱陶しいなあ」と感じることもありますが、年齢が離れていることもあり、また男の子ということもあり、ただただ可愛いのです。そして1歳年下の妹。物心ついた時には、すでにそばにいて、見返す写真はいつも二人一緒です。

そんな、まるで双子のように育ってきた私たちですが、やっぱり私はお姉ちゃん。お姉ちゃんという権力を利用して、自分の都合の良いように妹をつかってきたところがあります。例えば何かものを取ってきてほしい時、言ってもなかなか動こうとしない妹に「5・4・3・・・。」とカウントをとると、めちゃくちゃ文句を言いながらも自然に体が動いてしまうのか、最終的に動いてくれる妹。もし、自分が妹の立場だったら、「最悪な姉だな」と思うはず。そんな妹も成長するにつれ、もうカウントごときで動いてはくれません。お気に入りの服の取り合い、文房具の取り合いなどで喧嘩になると、叩き合い、髪の毛の引っ張り合い、蹴り合いになります。ヒートアップすると母に止められ、叱られます。そんな時、やはり私のほうが妹より叱られ、我慢することが多いし、それは、「私がお姉ちゃんだからだ」と理不尽に感じていました。しかし、よく耳にする「お姉ちゃんだから我慢しなさい。」と両親にいわれたことはありません。

昔、私が拗ねて泣いた時、母に言われたことがあります。「好きでお姉ちゃんに生まれてきたわけじゃないやろ。ママもそうやったし。たまたま愛茉が一番最初に生まれてきてくれたんやん。」と。『お姉ちゃんだから』と言わなかった母の思いを知り、なんだかとても心が軽くなりました。大げさに言うと『お姉ちゃん』から解放されたような、ただの『大和 愛茉』という一人の人間でいいのだと思えたのです。

今でも妹とは一緒に遊んでは喧嘩をしています。そしてその日常が心地良く、私を元気にしてくれるのです。そう感じられるようになったのは、私がちょっとだけ成長したことと、成長させてくれた私の騒がしい家族のおかげなのだと思います。時々母から聞かされる妹からの私への本音、分かっているにしても、やっぱり照れくさくて、うれしくて。自分も同じ気持ちだからこそ、なおさら照れくさいのかもしれませんが。一人っ子がよかった、生意気で喧嘩ばかりする妹よりも、優しいお兄ちゃんが欲しかった。もちろん、ないものねだりの欲は考えだしたらきりがありません。けれど、やっぱり私は『お姉ちゃん』、お腹の中にいた時からお母さんを独り占めできていたのは私だけ。このような小さな優越感と、姉という人生の先輩風を妹に吹かせながら、これからも『お姉ちゃん人生』を全力で楽しみます。

毎日喧嘩ばかり、嫌いなはずなのに、なぜか気づくと一緒にいてしまいます。大好きなのに大嫌い、姉妹って本当に不思議です。妹には照れくさくて面と向かっては言えませんが、今一番伝えたいことは「由依が私の妹で最高に楽しいです。」ということです。

ありがとう、私の大好きな妹。

ありがとう、私の大好きな家族。

これからも、よろしくお願いします。

友達

北宇治中学校1年 小^こ林^{ばやし}里^り衣^い子^こ

わたしはこの夏、一冊の本を読みました。その本には、友達の様々な人間模様について書かれていて、世の中には、「友達」とひとくくりに言っても、色々な人がいるなど考えさせられました。

わたしが小学生のころ、性格の違う友達との関係で、悩んでいたことがありました。そのとき、母がこんなことを言ってくれました。「ドラえもんの話で、思うことあんねんけど。みんな性格も、家庭環境もキャラも違うけど、ずっと友達やん。だから、違うことがダメなことじゃないし、絶対みんないいところはあんねんし、それより、同じことで笑ったり、同じことを頑張ったり、同じ気持ちになったり、同じ空間にいて安心したり、同じ時間を過ごして思い出を増やしたり、同じ失敗したり、たまに一緒に怒られたり、そういう同じところがあるってことの方が友達には大事なんちゃう。」

わたしは、それを聞いて、すごくすごく納得しました。確かに、自分と違うというところを認めて、嫌だなど思うところを好きになるのは難しいけれど、人のいいところを見つけたり、同じだなど思うところを大切にしたりすることで、もっと仲良くなれると思います。

わたしにも「友達」と呼べる、大切な人達がいます。一緒にふざけ合う「友達」、失敗したときに笑ってくれる「友達」、そばにいてだけで安心できる「友達」、それぞれみんな性格も考えも違うけれど、わたしにとって同じ時間を過ごして、たくさんの『同じ』を共有することのできる、大切な「友達」です。

自分と違うということが、仲良くなれないというわけではないし、自分にはない考えが、わたしにとって、発見や学びだったりすることもあると思います。だから、自分と同じだから「友達」というわけでもなくて、一緒にいる時間が楽しかったり、いざというときに同じ方向を向いたり、それが「友達」なんじゃないかと思いました。

わたしは友達が大好きです。

これから同じ時間を過ごしていくなかで、時にぶつかることも、分かり合えないこともあるかもしれないけど、わたしは、大好きな友達のいいところをたくさん知っています。だから、違いを楽しみながら、大好きな友達と見つけた『同じ』を、思いっきり共有していきたいです。そして、この先出会う人達の、すてきなところに目を向けます。

「親しい友」と書いて親友。

「信じあえる友」と書いて信友。

「心の友」と書いて心友。

友達にも、色々な友達がいていいと思います。友達の個性も、自分の個性も大切にしていきたいです。

だって、みんな違って、みんないい。

やっぱり友達っていいな。

優先席と心の声

南宇治中学校3年 いちむらのなか
市 村 望々花

ある混雑した電車の優先席に若い男の人が座っています。これを見て、あなたはどう思いますか。

鉄道、バスなどの公共交通機関に設置されている優先席。優先席とは身体障がい者、ご年配の方、妊婦、病気やけがをしている人に席を譲るよう指定した座席のことです。そのような対象はあるものの、空けておくべき席ではないため、誰でも座って良いとされています。しかし、空いていても座るのは少し気が引けてしまう人もいるのではないのでしょうか。

「混雑したバスで優先席が空いている時、座る派と座らない派どっちが多いのか」というアンケートの結果、「座らない」が六割以上を占めていて、その理由は周りの目が気になるという意見がほとんどでした。一方、座る派は自分が座った分、新しく乗り込む人のスペースが空くなど、車内の混雑回避を重視する声が目立っています。もちろん優先席対象者の乗車時には、席を譲ることを前提にしていました。どちらの意見も納得できますが、私は優先席に座ることに抵抗があります。それは外見では気付けない障がいを抱えている人がいた時、私たちには気付くことができないので、その人が座りにくい状況になるのではないかと考えてしまうからです。見た目は元気に見えても、何か事情があって優先席に座っている人がほとんどだと思います。

先日、こんなニュースを見ました。手足三本を失い、障がい等級が一種一級の男性が電車で優先席に座っていたところ、義足が服で隠れていて見えず、女性に「ここはあなたが座る席じゃない。違う席に座りなさい」と注意されたそうです。私はこのニュースを見た時、女性がとった行動がすごいなと思いました。たくさんの方が乗っている中、優先席を必要としている人を思って声をかけることができる。このような人のおかげで公共の場を快適に利用することができるのではないかと思います。しかし、この男性のように一見優先席に座る必要がないように見えても、障がいがあり周りの配慮を必要としている人がいます。優先席とはどうあるべきなのでしょう。

優先席の文字には「優しい」という漢字が含まれています。ですから、私が思う優先席とは、みんなが優しい気持ちで、普通席よりも「思いやり」を持って座る席だと考えています。普通席でも譲り合いは必要です。しかし、優先席が必要な人はたくさんいます。周りを見て、他に必要としている人がいなかったら使えばいいし、譲った方がいいときは今座っている人がすすんで「どうぞ」と譲れるような心のゆとりがあったらいいなと思います。

ある混雑した電車の優先席に若い男の人が座っています。これを見て、あなたはどう思いますか。見た目では分かりづらい障がいがある人、様々な理由でヘルプマークをつけている人など、優先席を必要としている人はたくさんいます。時と場合に応じて譲り合う心を一人一人が持っていれば、乗っている全ての方が快適に過ごすことができ、より豊かな社会に繋がるのではないのでしょうか。また、困っている人がいたら自分から声をかける、必要としている人が座れるように第三者が声をかける。その一言の勇気で困っていた人が救われます。そして全ての方が丸い心を持ち、どんな人でも安心して公共交通機関を利用できる社会になることを心から願っています。

職人が創り出すもの

木幡中学校3年 日 比 七 彩

私には、将来の夢がある。それは自分と関わる全ての人を笑顔にすること。だから、人を笑顔にできる職業に憧れている。そんな私は、去年の夏頃に、仕事という生き方について考えさせられる体験をした。

去年の夏、私の祖母が亡くなった。祖母はある手術を受け容体が急変し、突然この世を去ってしまった。簡単な手術だと言われていただけに、身内が受けた衝撃は相当なものだった。私は祖母の心臓が完全に止まる前に、一度病院に行った。父と叔母と祖父と共に、集中治療室へ入った。数本の太い管につながれた、見たことのない顔色の祖母がそこにいた。「もう脳が死んでしまっただけで助かる見込みはないけど、管を全てはずすことはできない。」と医者は悔しそうに言った。全員が泣き崩れた。味わったことのない異様な空気感や身内の死という衝撃に押し出されるように、私も涙が止まらなくなった。

その数日後、祖母の心臓は止まったらしい。朝起きた時、何でもないように父は私に伝えた。父の目は赤かった。

私はそれから始めて学校を早退した。祖母のお葬式に向かうために。それが人生で初めてのお葬式だった。到着すると、驚くべき光景が広がっていた。叔母が棺に眠る祖母の爪にネイルをしていたのだ。それも笑顔で。叔母はネイリストで、もう何十年もたくさんのお客さんの手元を彩ってきたプロだった。私が近付くと、「最期もきれいにしてあげたいし、ばあばもな、喜ぶと思うから。」と、祖母の爪から目をそらさず言った。祖母はきらきらした派手なものが好きだったから、こうしてネイルをしてもらって幸せだろうな、と思った。

しばらくして、ネイルを終えた叔母は立ち上がり、一気に顔を歪めて泣いた。ついさっきまでの笑顔がまるで嘘のように思えるほど泣きじゃくる叔母がいた。その時気づいた。自分を育ててくれた大切な母親の亡骸を目の前に、冷たくなった手を握って爪を塗るなんて、簡単にできることではないのだと。作業中のあの時間だけは、叔母は母のお葬式に参列した娘ではなく、プロのネイリストとしてそこにいた。お客さんの前では、何があっても笑顔で対応する。それは確かに、働く上でいつまでも大切にすべき信念だろう。しかし、その信念をこんな状況でも持ち続け、涙を抑え続けた叔母の背中が、まさに職人のものだった。こういう人になりたい、そう強く思った。辛いことがあっても、支えてくれる人の前でこそ笑顔でいなければ誰かを笑顔にすることなんて到底できない。

何のために働くのか。そう問うと、お金、やりがい、生きるためなど、いろんな答えが出てくるだろう。現時点で私は働いていないが、「何のために働ける人でありたいか。」、そう問われたら、私は誰かの笑顔のために働ける人でありたい、と答える。

私には、将来の夢がある。それは自分と関わる全ての人を笑顔にすること。そして、そんな自分が笑っていただけることだ。プロのネイリストとしての叔母の姿を見て、働く上で自分の利益や地位などではなく、どんな状況でも誰かの笑顔を想って働く信念が大切だと気付いた。

だから私は自分の夢を叶えるために、職人になりたい。一つのことを追求し、極めることで生み出される唯一無二のもの。そしてそこから感動や笑顔を創りだせる、職人。そんな職人に、私もなりたいと思っている。

家族が一人増えました。

槇島中学校1年 し
清 みず
水 いち
唯 か
楓

私は、この夏、四姉妹になりました。

最初は、お母さんのつわりがひどく、妊娠は大変なことだと思いました。妊娠後期になり、お腹が大きくなって、ぼこぼこ動くようになりました。お母さんに痛くないのかと聞いたら「一人の人間の中に、二つの命があるっていうことは、神秘的で胎動は幸せな痛みだ」と、言っていました。性別も分かり、家族皆で名前の案を出し合いました。いくつかの案がでて、なかなか決まりませんでした。自分の名前も同じように悩んでくれたことを知りました。

ついに出産の日がきました。お母さんは、前の日から入院しましたがなかなか産まれず、次の日になってしまいました。家族が呼ばれ、赤ちゃんにもうすぐ会えるというドキドキ、ワクワクした気持ちで病院に向かいました。分娩室のドアを開けると、そんな雰囲気ではありませんでした。痛みをたえるお母さんを見て、その場から逃げ出したくなりました。お姉ちゃんはお母さんの姿を見て、涙が止まらない様子でした。助産師さんが「お姉ちゃん優しいね」と言ってくれましたが、お母さんは「軟弱者なだけです」と言っていました。さっきまで痛がっていたお母さんが、急にそんなことを言うので、その場が笑顔になり、出産の時でも面白いお母さんは、すごいと思いました。だんだん痛みが強くなっていき、私はなんて声をかければ良いのか分からなくなりました。お母さんに手をにぎられ、痛さが伝わってきました。病院の人たちが、あわただしくなってきた、いよいよ生まれそうで緊張しました。次の瞬間、大きな産声が聞こえました。命の誕生の瞬間です。お父さんは、赤ちゃんを見て「かわいい」「ママおつかれ様」「かみの毛ふさふさやん」と言っていました。お母さんは、先ほどまでの痛みがうそのようにうれしそうに笑っていました。私は、自然と涙が出ていました。

私は、ほとんどの人が立ち会えない、お母さんの約十カ月の妊娠から出産まで立ち会わせてくれたことに、感謝しかありません。改めて出産について知り、子どもの育児や約十カ月お腹で守る苦勞を知り、お母さんに一生かけても感謝しきれないと思いました。お母さんのありがたみ分かる、貴重な体験を味あわせてくれた、お母さんに感謝しかないです。私は、お母さんの子どもで良かったし、お母さんが大好きです。みなさんが産まれた時の話をお父さんやお母さんに聞いてみてください。名前をきめた時の話や、出産の時の話を聞いてみてください。家族で話すきっかけにしてくれたら、うれしいです。私は、この経験を通して、これから一生かけて両親に感謝していきたいし、お姉ちゃんと妹二人と家族仲良く生きていきたいです。

私の弟

黄檗中学校1年 しろ
城 た
田 あや
絢 ね
音

皆さんは、「障がい者」に対してどんなイメージを持っていますか。私は自分と違うところが結構あって大変なのかなと思っていて、正直障がい者に対しての隔たりを無くすことは難しいと思っていました。ですが、9つ下の弟が生まれてから障がい者についての考え方が変わりました。

私の9つ下の弟はダウン症という障がいがあります。母から初めて聞いたときは少しびっくりしたし、今までの妹や弟と違うところが多いのかなと不安に思っていました。今までの妹や弟は産婦人科で生まれたら1週間くらいで退院できて、すぐに家で遊んだり、かわいがったり、抱っこをしていました。ですが、ダウン症の弟は生まれてすぐに1回だけ抱っこができただけで、すぐに大きい病院に搬送され、NICUという「新生児特定集中治療室」に入ってしまった。入院中は親以外の面会は禁止されて、ずっとガラス越しに顔を見るだけでした。これからは今までと違う生活になって、大変なことも増えていくと思っていました。けれどやっと退院できて、家族全員揃う生活に戻ると、やっぱり妹や弟の赤ちゃんの頃と同じようにかわいくて、少しずつできることが増えていく弟を見るたびに家の中がさらに明るくなり、笑顔や笑い声が絶えない毎日になりました。また、弟を通じて他のダウン症の子どもや、いろいろな障がいの人、その家族と出会う機会もありました。自分たちと本当に何も変わらない人たちで、障がいがある人に対しての隔たりは何だったんだろうかといろんな人と関わっていくうちにそう思えてきました。

弟は、障がい以外にも目の病気や足が悪いなどで何度も手術を受け、通院をするなどで、両親は大変だったと思うし、今までと違う苦労があったと思うけど、自分と成長のスピードが違うだけで弟は、地に根を張るようにゆっくりしっかりと日々成長しています。弟は目の病気で3歳までに7回手術を受けています。手術のための検査や処置を受けたりしていて、自分だったら怖くなってしまふようなことも泣かずに頑張っています。弟は、家族の誰よりも強いんじゃないかと思います。そして、弟の笑顔は日々の疲れを一瞬で吹き飛ばしてしまうほどの最高の笑顔です。母が「4人兄弟全員同じお腹から生まれてきたのに、一人ひとり性格も顔も違う。だから障がいがあることもその子の一部で「障がい者だから」という風な特別な感じがしない。」と言っていたのを聞いて、自分も同じように思ったし、障がいがあるから何かが大変だと感じるものがなくなってきました。

私の家族は、弟に対して健常者の子たちと変わりなく優しく接してくれて、かわいがってくれる人たちに囲まれていて恵まれていると思います。私の友達も他のきょうだいと同じように遊んでくれたり、とてもかわいがってくれていつもうれしく思っています。ですが、世の中には「障がい者」に対して冷たくあつたり、傷つけたりしている人たち、そしてその行動のせいで苦しんでいる人たちがいます。弟の周りもそんな人たちがいないわけではありません。それでも私は健常者と障がい者で区別があるわけではないと思います。そして障がい者が健常者になることはありませんが、健常者が障がい者になる可能性は十分にあります。私たちと障がい者の間には何も壁なんてありません。そして障がいをもっている人を障がい者とみてはいけないと思います。「障がいがある」ではなく、「苦手なことが人よりも多い」と捉えることも重要なことだと思います。「健常者だから」「障がい者だから」のように区別されず一人の人として関わり合えて、苦しむ人が少しでも少なくなる世界になるべきだと、私は思います。

講 評

宇治市青少年健全育成協議会 会 長 畠 繁 行

第42回 宇治市「中学生の主張」大会で発表いただきました11名の皆さん、本日は本当に素晴らしい発表を誠にありがとうございました。本日の舞台での発表時間はとても短いものでしたが、今日に向けて様々な準備をしていただいたと思います。その成果をこの大きな舞台で、また、多くの視聴者の前で存分に発揮していただきました。本日の発表はすべて、皆さんの「心の声」であり、私をはじめこの会場におられるすべての皆様の心に届く作品ばかりでした。大変感動しました。ありがとうございました。

さて、今年発表の内容を少し振り返ってみたいと思います。

「祖父の病気をきっかけに自分の生き方の新たな考えを見つけた事」・「祖母の死と言う不幸な出来事の時の叔母の行動によって感じた職人の素晴らしさ」・「妹と弟との家庭の出来事によって学んだ家族の大切さ」・「妹が出来て家族が増えて感じた両親への感謝の気持ち」・「障がいのある弟を通じて感じた本当の人間の在り方」等、家庭や家族とのかかわりや出来事によって改めて考えた発表がありました。また、「学校でのLGBTQの学習から学んだ人権の本当の大切さ」・「学校での友達関係から本当の友達の大切さを改めて見つめ直した事」等、学校などでの出来事で考えた事。毎日ニュースで報道されている「戦争での不幸な出来事で感じる平和の有難さ」。自分自身の経験から「海外の研修で知った挨拶や会話などのコミュニケーションの大切さ」。普段の出来事から感じた「公共交通機関での優先席の在り方や使い方やその意味」。自分自身のことを改めて考えての「自分の生き方を見つめ直した時の本当に自由に生きる決意」。

以上、皆さんの主張を振り返ると、改めて大変立派な主張ばかりだと感じます。すべての発表で、命や絆の大切さを改めて感じました。自分の経験や自分の周りの出来事を素直に感じ、考え、発表してくれた事に感謝致します。

今日発表して頂いた皆さんが、紙に書かれた文章をただ読むだけでなく、しっかり外に向けて伝えようとする気持ちが強く感じられました。今回の主張発表の経験が、これから社会に向けて歩まれる皆さんの「力」と「支え」になってくれると信じております。発表者の皆さんのこれからの人生が、今まで以上に充実したものになる事をお祈り致します。

主催する私たち大人は、皆さんをはじめ子どもたちを、家庭・学校・地域が一つとなって支え励ましていくことを、改めてお約束致します。

最後になりましたが、11名の中学生の主張に最後まで耳を傾け、温かい拍手を送っていただきました会場の皆様方にお礼を申し上げますとともに、この大会開催に向け準備していただいた皆様方に感謝を申し上げ、講評とさせていただきます。

表



宇治市教育委員会賞
木幡中学校3年 日比 七彩

彰



宇治市青少年健全育成協議会賞
北宇治中学校1年 小林 里衣子



宇治市連合育友会賞
西宇治中学校1年 大和 愛菜



第42回 宇治市「中学生の主張」大会の振り返り



京都府立宇治支援学校による展示コーナー



今年度は、2階のロビーで宇治支援学校の取組の紹介や中学部生徒の作品展示を行い、多くのご来場の皆様にご覧いただきました。

閉会のあいさつ

本日発表された中学生のみなさん、お疲れ様でした。そして、たくさんの感動を私たちに届けていただき、本当にありがとうございました。

このような舞台上で発表されることは、とても緊張したことでしょう。しかし、このような機会はなかなか出会えるものではありません。皆さんが常日頃の想いを主張という形にしたこと、そして、これまでのたくさんの学びや経験が、みなさんをこの舞台へとつなげていったのではないかと、思います。

中学生が声を上げて、何も変わらないんじゃないか。そんなことを思う生徒さんも、もしかしたら周りにおられるかもしれません。もし、そう思っている友達がいたら、「それは違うよ」と、みなさんも伝えてあげてください。なぜなら、みなさんの発表は現に、この場にいる大人たちの心を揺さぶり、揺り動かし、感動させ、確実にこの場にいる全ての人々の心に刻み込んだのですから。どうか自信を持って、今日の経験を胸に、これからの人生を歩んでいただきたいと、思います。

さて、本日の主張大会にご臨席いただいたご来賓の皆様、生徒たちを導いてくださった学校の先生方、保護者の皆様、お手伝いいただいたPTA役員の皆様、見守っていただいている地域の方々、お忙しいところお越しいただき、誠にありがとうございました。新型コロナウイルスによる学校の閉鎖など、未曾有の状況を乗り越えた今、こうして中学生の主張大会を制限なしに開催できたことが嬉しく、皆様方には感謝の気持ちで一杯です。

また、本大会の開催にあたり、大会の準備、運営に携わっていただいた皆様、そして本日の司会進行の大役を果たされた、お二人の生徒さん、素晴らしい表紙絵を描いてくださった生徒さんに、心よりお礼を申し上げます。

これからも中学生のみなさんが、笑顔で生活し、未来に希望が持てるよう地域で応援し、支えていける街であることを誓い、ご参集の皆様の益々のご発展とご健勝を祈念し、結びとさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

宇治市連合育友会
会長 青木 英明

京都府立宇治支援学校中学部の学び

宇治支援学校には、宇治市や城陽市在住の生徒が通学しています。生活単元学習「地域に学ぼう」では自分達の身近な地域を取り上げて、毎年学習をしています。昨年度は、宇治について学び、今年度は、城陽の特産品や歴史等を題材に学習を進めました。特産品の「いも」や「金糸」を触ったり、「梅」や「お茶」を香ったり、五感をつかってそれぞれの特徴に親しみました。また、城陽の古墳について興味をもてるように、粘土で「はにわ」作りをしました。

楽しみながら学習が進められるように、はにわの「ハニーちゃん」と一緒に「はにわダンス」や「はにわ発掘ゲーム」をしました。粘土をちぎって丸めたり、握り込んだりして自分の好きな形の「はにわ」が作れた時はとても満足げな様子でした。

本物に触れ、体験的な活動をする事で、生徒たちはいきいきとした表情で学習しています。



主張発表生徒・司会生徒・表紙絵作成生徒と 市長との懇談会 当日の様子

令和5年11月17日（金）午後3時30分より、市役所7階特別会議室にて、松村淳子市長と発表生徒10名（1名欠席）、司会生徒1名、表紙絵作成生徒1名、司会兼表紙絵作成生徒1名との懇談会を開催しました。



開会后、出席者の緊張した様子を見られた市長からの、「カチッとしてもしんどいし、ざっくばらんにいきましょう」というお言葉で和やかになった懇談会は、あっという間に終わりを迎えました。生徒からは「あのような場を設定してもらってうれしかった」、「観客に自分の思いが届くように笑顔を意識した」等の発言がありました。

松村市長からは、「これまではコロナ禍でなかなか人と交流できなかった、ということもあり、今回は「人」を視点にしたテーマが多く、みなさんの関心が「人」に向いていることが分かった主張大会でした。受験がある人はこれから頑張ってください。一年生と二年生のみなさんは、まだまだこれから楽しみながら中学校生活を送ってください。」とのコメントをいただきました。



第42回宇治市「中学生の主張」大会 実行委員会

実行委員長 木上晴之 宇治市教育委員会教育長
副実行委員長 寫繁行 宇治市青少年健全育成協議会会長
副実行委員長 青木英明 宇治市連合育友会会長

【委員】

岩井佳慧	宇治中学校	中村華	立命館宇治中学校
大石久美子	北宇治中学校	二宮智代	京都府立宇治支援学校
岡田菜摘	榎島中学校	山田裕一	中学校長会担当校長
山本諒	西小倉中学校	齊藤和男	青少年健全育成協議会副会長
福西眞佐美	西宇治中学校	藤田佳廣	青少年健全育成協議会副会長
林絵麗那	南宇治中学校	雪浦淳平	連合育友会中学委員長
水嶋優子	広野中学校	福井康晴	教育部長
坂井克己	東宇治中学校	林口泰之	教育支援センター長
久保季奈	木幡中学校	岡野健太郎	学校教育課長
上原雅央	黄檗中学校	堀江紀子	教育支援課長

【講評団】

寫繁行 青少年健全育成協議会会長
青木英明 連合育友会会長
中井良幸 中学校長会会長
林口泰之 教育支援センター長

【事務局】

宇治市教育委員会 教育支援センター 教育支援課
〒611-8501 宇治市宇治琵琶33
TEL 0774-20-8766 / FAX 0774-21-0400
E-mail kyoikushienka@city.uji.kyoto.jp

第 42 回宇治市「中学生の主張」大会まとめ

発行月 令和 6 年 1 月

発 行 宇治市教育委員会 教育支援センター 教育支援課

表紙絵 宇治市立宇治中学校 3 年 ^{うめ}梅 ^{かわ}川 ^{さい}菜
3 年 ^の野 ^{むら}村 ^{ひよ}聖 ^り和



2023



宇治市教育の日
シンボルキャラクター
ハチャ君